

TSUKU COMM

53

2021
AUTUMN

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌 [ツクコム]



筑波大学
University of Tsukuba



TSUKUBA

04 聴 TSUKUBA FRONTIER
知識と情報で人をつなぐ
認知症にやさしい図書館づくり
呑海沙織 教授

08 TSUKUBA ALUMNI
明和電機 代表取締役社長
土佐信道 氏

10 LIFE 筑波大生
ガンバヤル・ドリギオンさん
水江光希 さん

12 TOPICS

17 附属学校だより

18 リレーメッセージ

知識と情報で人をつなぐ

認知症にやさしい図書館づくり

図書館というと、本を借りたり勉強をする場所、静かに過ごさなければならない場所、というイメージを持つ人も多いでしょう。

しかし近年は、不登校の子どもたちやリタイアした人々の居場所としても捉えられるようになってきました。高齢化や多様化が進む社会の中で、

知識や情報を提供する公共の場である図書館はどのような役割を担えるのか、

「認知症にやさしい図書館」をキーワードに、その新しい在り方を模索しています。

多様化する図書館の利用者

図書館が担う基本的な役割は、知識と情報の提供です。そこには、単に本や資料を集めて整理し、貸し出すというだけでなく、それに付随する、さまざまなサービスが含まれます。利用者も多様化しており、それに応じた対応が必要になってきています。

中でも関心が高まっているのが、認知症支援。政策としても認知症対策が重点化される中、掲げられたアプローチが「認知症にやさしい図書館」です。「認知症にやさしい(dementia friendly)」とは、あらゆる人が認知症について知り、理解することで、認知症の人が「理解されている」「存在価値がある」「地域に貢献することができる」と感

じることができる状態です。認知症の人に親切にする、というのではなく、認知症についての偏見や間違った考え方をなくすための知識や情報の基盤を作り、認知症の人も使いやすい環境をつくることが求められています。

ですから、サービスの対象は、認知症の人やその家族などの支援者はもちろん、今現在は認知症との直接的な関わりをもたない人々も含めた全ての人に及びます。誰もがいずれは高齢になり、認知症になる可能性もありますから、みんなで認知症を理解し、そのために必要な知識や情報を持つこと、また、認知症の人やその家族が過ごしやすい場所を得ることが重要なのです。

図書館情報メディア系 教授

呑海 沙織

さまざまな連携で支える

とはいえ、認知症にやさしい図書館は、図書館の努力だけでは成立しません。これまでとは異なる配慮やサービスを整えなければなりませんし、そのための教育や訓練も必要です。認知症の人にどう接したらいいのか、現場の戸惑いも聞かれます。そのような声に応える形で、まずはガイドライン作りから始めました。

2017年に発表されたこの「認知症にやさしい図書館ガイドライン」には、認知症に関して図書館が提供すべきサービスだけではなく、認知症の症状、認知症の人やその家族との関わり方の指針も示されており、他国の参考にもなっています。図書館情報

居心



学や老年看護学の専門家、図書館員、認知症当事者など、さまざまな人々との議論を重ねて作成しました。ただ、認知症の症状は個人差が大きい上、配慮したつもりの対応が当事者の自尊心を傷つけてしまうことも分かってきました。こういったことを反映し、より役に立つガイドラインへの改訂作業にも取り組んでいます。

認知症に限らず、病気になる、自分で本やインターネットを調べ、その膨大な情報量にかえて不安になってしまう経験は誰にでもあるでしょう。そんな時に頼りになる

のも図書館です。新しいサービスとして期待されているのが、イギリスで実施されている「本の処方箋」プロジェクト。認知症診療にあたる医師やカウンセラーと連携し、認知症に関する直接的な情報だけでなく、関連する小説や絵本なども含めて、あらかじめ用意されたリストからその人の症状や心の状態、知りたい事柄に適した本を紹介するものです。日本の実情にあった本の処方箋を目指すべく、プロジェクトが進んでいます。

人々をつなぐ場所

考えてみると、図書館というのは壮大な意味をもつ場所です。外国で書かれたものや、何百年も前に書かれたものでも、本という形になっていれば、現在の日本で読むことができる、つまり、本は、離れた場所や過去の時代を生きたと、私たちとをつなげてくれるものです。一冊の本を通じてたくさんの人が結びつくことができる場所が図

書館なのです。

インターネットが普及し、図書館不要論が議論されたこともありましたが、しかし一方で、居場所としての図書館が見直されています。従来のイメージを広げ、車に本を積み込んで各地を回る移動図書館を活用し、屋外で、飲食をしながら、などさまざまなスタイルで本と出会う場所づくりが進んでいます。高齢者が子どもに読み聞かせをしたり、案内役としてロボットを活用するといった、新しいサービスも登場してきました。

また、ヒューマンライブラリという試みも行われています。一人の人を一冊の本とみなして、その人の人生を語ってもらうものです。もともとは、障害者やLGBTQなどのマイノリティが、自分のことを理解してもらうための活動でしたが、認知症の人たちにも語れることはたくさんあり、そこから豊かな学びも得られます。そうやって、認知症の人にもサービスの提供者になることができるのです。

思い出すことが力になる

認知症の進行を防ぐ方法の一つに「回想法」があります。昔のことを思い出して言葉



にすることで脳を活性化させるものです。そのときに、記憶を呼び起こすきっかけとして、本や絵葉書、音楽、古い道具、石けんの香りなどなど、いろいろなもので五感を刺激します。海外では、図書館が、地域に残っているそういった資料を集めて、回想のためのキットとして貸し出しを行っています。これは、認知症の本人や支援者と一緒につくるサービスとしても有効で、日本でも同様の活動に向けた検討が始まっています。

また、回想するための手法として綿拔豊昭教授(本学図書館情報メディア系)考案の「思い出し俳句」を提案しています。昔の思い出を俳句で表現し、図書館で「句会」を開いて、みんなが作った俳句をお互いに評価します。評価といっても、文学的な良し悪

PROFILE

京都大学での図書館員を経て、1998年7月より本学で、教育・研究に従事。博士(創造都市)。専門は、図書館情報学。研究テーマは、知識情報による共生社会の創出、認知症にやさしい図書館(Dementia Friendly Libraries)。主な著書に「高齢社会につなぐ図書館の役割：高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み」(学文社、2012)、「超高齢社会と図書館：生きがいづくりから認知症支援まで」(国立国会図書館、2017)など。現在、知識情報・図書館学類長。

しではなく、その句からどれだけ昔のことを思い出せたかがポイントです。個人の思い出でも、俳句になると、そこからそれぞれの記憶がよみがえり、句会は大いに盛り上がります。

誰もが居心地のいい図書館へ

かつて認知症は、痴呆症などと言われ、差別的に捉えられる側面がありました。認知症になったら病院や施設へ、という対応も行われてきました。しかし昨今では、私たちの普段の暮らしの中で、認知症の人とともに過ごす、という考え方が世界的な流れです。交通機関、金融機関、学校など、あらゆる場面で、そのような考え方が取り入れられつつあり、図書館の取り組みは決して特別なものではありません。敢えて認知症にやさしいということを掲げなくても、そのようなサービスが提供されることが理想です。

図書館は公共の場。誰でも目的を問われ

超高齢社会と図書館研究会

超高齢社会における図書館について考える研究会として、2016年に発足。図書館による高齢者を対象としたサービスにとどまらず、図書館という「場」を活用した世代間交流、高齢者の生きがい支援、高齢者の知恵や経験を生かした図書館サービス、認知症の人やその家族の居場所としての図書館、認知症への理解を深めるための普及・啓発など、超高齢社会における図書館のあり方をともに考え、話しあい、実践している。

URL
<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/~donkai.saori.fw/a-lib/>



ず、無料で利用することができます。「屋根のある公園」といわれるほど、自由で開かれた場所であるのが図書館です。迷惑をかけてはいけない、と遠ざかってしまうのではなく、むしろ、自分が認知症になった時に居心地のいい図書館と考えると、これからの在り方が見えてくるはずですよ。



TSUKUBA ALUMNI

アート・ユニット「明和電機」
代表取締役社長

土佐 信道 氏

明和電機の活動について 教えてください

ナンセンスマシンという、芸術的なパッションと機械という理性の両方を兼ね備えたユニークな道具を作るアートユニットです。自分が使って見せないと、その道具が何なのかが分からないので、ライブパフォーマンスという形で作品を発表しています。デモンストレーションのしやすい楽器のような作品が多いと思われがちですが、コンセプチュアルなものや半々ぐらいで制作しています。キュート&メカニカル、見た目の可愛らしさと技術的な面白さが、明和電機の持ち味です。

アートから機械工作、ライブコンサートまで、さまざまな活動をしています。なんでもやってしまうと、かつては器用貧乏と言われてたりもしましたが、幸いなことにマルチメディアの時代になって、できることは全部生かせるようになりました。「明和電機」は



(撮影：三橋 純)

不可解なイメージを ナンセンスマシンで表現する

それらを入れておく箱のようなものです。この箱があるおかげで、活動の幅をいくらでも広がられます。我ながら大きな発明ですね。

ナンセンスマシンは どうやって生まれたのですか

筑波大の芸術専攻には工場みたいなどころがあるんです。フライヤや旋盤などの工作機械が並んでいて、そこに入り浸っていろんな加工方法や設計を学びました。それが大きかったですね。ナンセンスマシンのアイデアは、漠然とは持っていましたけど、それを具体的な形にすることができるようになったわけです。

電子工作は小学生ぐらいからやっていましたが、姉が通信技術に詳しくて、なんとなく教わっていた程度で、特に興味はありませんでした。電子回路で中何が起こっているかわからないでしょ。それが苦手。学生時代に、今で言うメディアアート、電

子回路を使ったアートが登場して、それに影響されました。絵筆という感情的な表現ツールに、機械というとても理性的なツールが加わりました。

ときどき頭の中に浮かぶ不可解なイメージがあります。自分と世界とのずれ、違和感みたいなものがビジュアルとして現れるんです。それが作品制作の動機です。そういったイメージの源の多くは、生物や生命です。生物の仕組みとか振る舞って、分からないことだらけだけど芸術的で、それこそナンセンスマシンですね。

卒業後の進路として 「アーティスト」を選ぶことに 不安はありませんでしたか

小さい頃から絵描きになりたくて、自分で芸術作品を作って売る、というシンプルな生き方を志向していました。就職する気はさらさらなかったですね。学生時代は、

どうしたら芸術家として生きていけるかを考えていました。今ならネットを使っているプロモーションができますが、当時は、そういうものはなかったですから。

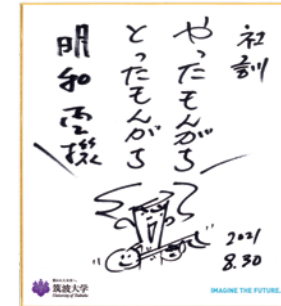
アーティストとして独立するきっかけになったのが、ソニー・ミュージックエンタテインメントが主催していたアートアーティストオーディションです。当時はマルチメディア時代の始まりの頃でしたから、ただの芸術家で応募してもうまくいかないと思って、



兄の正道 (右) とのツーショット (撮影：三橋 純)



(撮影：三橋 純)



PROFILE とさのぶみち

1967年 兵庫県生まれ
1991年 筑波大学芸術専門学群卒
1992年 筑波大学芸術研究科修了
1993年 兄正道とともに明和電機としてソニー・ミュージックエンタテインメントからデビュー。
青い作業服を着用し作品を「製品」、ライブを「製品デモンストレーション」と呼ぶなど、日本の高度経済成長を支えた中小企業のスタイルで、様々なナンセンスマシンを開発しライブや展覧会など、国内のみならず海外でも発表。
2009年に発売した音符の形の電子楽器「オタマトーン」は、累計売り上げ数100万本の大ヒット商品(2021年8月時点)。



インキベンチャーみたいなものとして、兄と二人で明和電機を立ち上げたんです。自分で自分に就職したということですね。

明和電機というのは、子供の頃、実家でやっていた電子部品を作る会社です。倒産してしまったのですが、昭和の経済成長期を思わせるようなダサカッコ良さを狙って復活させました。それが良かったのか、グランプリをとってデビューしました。

将来の野望はありますか

究極のおもちゃを作りたいですね。おもちゃというのは、人にあげたくない、自分が遊びたいものということです。それが何かはまだ分かりませんが、とにかく徹底的に考えて、自分が面白いと思えるものは、絶対に他の人も面白いという自信があります。馬鹿馬鹿しいものをできるだけ精度良く、真剣に追求していきたいですし、ナンセンスマシンのような表現が、どのくらい普遍的なのかを検証したいという欲求も強いです。

10年後に自分がどうなっているか、ビジネスマンならそういうビジョンがなくてはなりません、アーティストはとにかく変化し

続けることが重要です。10年後には、なにかとんでもないものになっていたい、と思います。世の中の流れや変化に応じて柔軟に変わっていきたくいです。変化するというのは、ボールの上でぐらぐらしながら立っているようなもので、じっと動かないでいたら転んでしまいますよね。

最後に、後輩へのメッセージを

初めてつくばに来た時、自分が生まれ育った瀬戸内の風景とはあまりに違って、月面基地に来たみたいな孤独感がありました。でも結果的にはそれが自分には合っていました。学生時代は自分に向き合える時間がたっぷりあって、自分の内面を見つめて、自分の芸術を作り上げることができました。今はネットで調べればすぐに答えがわかるし、失敗しないためのハウツーもたくさんありますが、それで安心してしまっはいけないと思います。東京に比べればつくばにはまだ孤独が残っていますから、それを利用して自分とは何かをじっくり考えてほしいです。

修士発表の様子。明和電機以前。なぜかタキシードを着ている。

世界にモンゴル芸術を広めたい

Ganbayar Dolgion



納豆を毎日欠かさず。大学が名産地の茨城にあってよかった。

ガンバイル・ドリギオンさん

芸術専門学群2年

相手の話が分からないままにしない。その場で聞き返す。水江さんのモットーだ。小さな情報の欠落でも、それが重なると、全体像が見えなくなることもあると思うからだ。

新生児スクリーニングで重度の難聴と分かり、乳児の頃から高等部までの18年間、本学附属聴覚特別支援学校に通っていた。

実は、自分が障害者だと感じるようになったのは、大学に入ってからだ。それまで教員や友人らとは手話で会話し、コミュニケーションに困ることはなかったという。

筑波大学を進路に選んだ理由の一つに、障害学生の支援充実がある。例えば、大学に申し出る

と、支援学生が紹介され、希望する講義の文字化などをサポートしてくれる。

それでも音が聞こえないと、周りがなぜ笑ったのか分からないことがよくある。相手の唇の動きは読めるが、早口だと大変だ。

入学直後は、分からずともそのままにしていた。周囲に聞いて、嫌われなくなかったからだ。そんな時、母の「周りは思ったより気にしてないよ」という言葉が転機になった。

それからは、聴覚障害を明かして積極的に人に声を掛けるようにした。周りの人たちは親切に対応してくれ、支援学生との交流も深まった。「大学生生活を楽しめる余裕が持てるようになった」と、水江さんは振り返る。

こうした経験を、聴覚障害を持つ後輩たちに話す機会も増えた。「カラオケに行くのが恥ずかしい」という中学生には、「リズムが違ってしまっても、一緒に楽しめばいい。聞こえているのに、みんな採点で100点取れてないじゃん」と答えたこともある。

昨年度は大学の手話サークル会長を務めた。手話表現を学び、手話を使ったゲームな

どで交流を深めることが活動の柱で、メンバーは約70人。聴覚障害者も約10人いた。

コロナ禍でオンライン化を迫られ、1対1での対応が難しくなる中、チャット機能の活用を打ち出した。話が伝わらなければもう一度繰り返すこともルール化した。「活動をみんなに楽しんでほしい」と考えてのことだ。

バリアフリーやユニバーサルデザインなどマイノリティー支援について深く学び、聴覚障害だけでなく、広く障害者全般の支援ができる仕事に就きたいと、夢を描く。

豊かな表情と身振り、手振り。障害に気後れしない姿勢。水江さんと話していると、聞き手の気分も明るくなる。そのコミュニケーション力が、社会のバリアをなくしていく。



LIFE 筑波大生

モンゴル・ウランバートル出身のガンバイルさん。日本留学を志したのは、小学生の頃から国際放送で見ていたNHKの番組がきっかけだった。その名は「プロフェッショナル仕事の流儀」。時代の最先端と格闘するプロの姿を描くドキュメンタリーだ。「自分の仕事に真剣に取り組む日本人の姿に感動し、自分も日本で学びたいと思った」という。

叔母が日本人と結婚していたこと、7歳年上の兄が先に日本に留学したことも気持ちを後押しした。目標実現に向け、高校ではウランバートルにある日本式の学校に進学。小中学校は飛び級したので、まだ13歳だった。

高校の授業は日本語で、物理など科学系の科目と美術が好きだった。16歳で卒業した後、モンゴルと日本でさらに日本語を学び、昨年4月、第一志望の本学に入学した。

前年のオープンキャンパスで大学を訪れ、自然に囲まれた立地が気に入った。芸術専門学群の教員、学生とも直接話せ、「来年、絶対に入学すると約束させられた」と笑う。



入学時はプロダクトデザインを専門にするつもりだったが、夢の実現に向け、今はビジュアルデザイン領域に進もうと考えている。

その夢とは、「ウルジーヘー」と呼ばれるモンゴルの伝統的な文様をモダンデザインに取り込み、「これがモンゴルの文様だと、世界の人々に知ってもらおう」とのことだ。

ウルジーヘーは紐を結んだような文様で、一筆書きできるのが特徴だ。繁栄や長寿が永久に続くことを願い、モンゴルの移動式住居「ゲル」や家具によく描かれている。

本学で2年間過ごして感じたのは、コミュニケーション力を磨く機会が、とても多いことだ。総合大学の本学には、多様な学問分野に、多くの国から留学生がやって来ている。それぞれにお国柄があり、考え方も異なる。その中で生活することで「自分を伝える

力と相手を理解する力がついた」という。

例えば、モンゴルでは相手に対し、直接的に物を言うことが礼儀正しいとされるが、日本では遠回しに物を言うことが好まれる。

コロナ禍で課外活動が難しい状況が続いているが、今年は、本学学園祭(雙峰祭)の中で芸術系の学生が企画・運営する「芸術祭」の実行委員になった。11月のオンライン開催に向け、作品展示などを準備中だ。

来日して3年余り。この間、4回引越越し、「遊牧民の血かもしれない」とはにかむ青年は、たくましさをもっと増している。

後輩にひとこと

目標を立てて、毎日努力すれば、できないことはないはず。大学に入ることが目的ではなく、大学に入って何を学び、将来何をしたいのかきちんと考えておくことが大切です。そうすれば、充実した人生が過ごせると思うので、私も努力を続けています。



人間学群障害科学類3年

水江 光希さん

小学生で水泳を始めた。水の流れを肌で感じるのが大好きだ。

Mizue Mitsuki



障害者の背中を押せる存在に

TOPICS

CAMPUS & COMMUNITIES

全国高校「探究」キャンプ in TSUKUBA 2021を開催

8月1日～20日にわたって、「全国高校『探究』キャンプ in TSUKUBA 2021」(本学人文社会系社会連携推進室主催)が開催されました。本学の人文社会学の専門知を高校生に体験してもらうとともに、同じ分野に関心を持つ日本中の高校生が交流するための、ゼミ形式でのイベントで、今年で3回目になりますが、昨年からはオンライン形式で実施しています。今回は、源氏物語から民主主義まで、本学ならではの幅広いテーマについて21のゼミが企画され、延べ202人の高校生が参加しました。各ゼミでは、先

生も生徒も学年も地域も関係なく互いに「呼び名」で呼び合い、オンラインならではのフラットな対話が盛り上がりました。いわゆる大学体験ゼミとは異なり、自分に関心のあるゼミに参加してディスカッションもできることから、高校生にとっては、自分と同じ関心をもつ仲間との出会いや、大学での学びへの期待を高める機会となりました。また、ゼミを主催した教員も、それぞれの

専門分野について、若い世代に対してどのように伝えていくべきかを考えるきっかけが得られ、双方に有意義な時間を過ごしました。

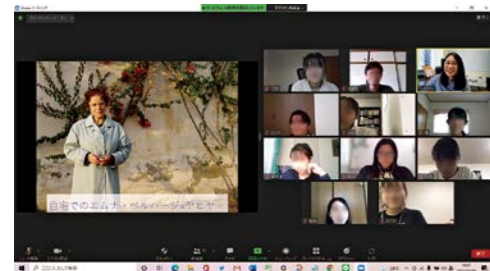


【ゼミの例】



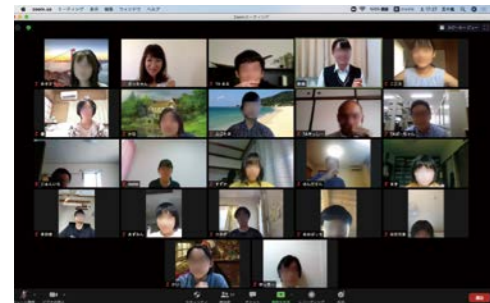
漢文徹底！読解 読めれば分かること (谷口 孝介 教授)

水戸光圀の自伝「梅里先生碑文」の石碑に刻まれた拓本を教材に、教科書で見るときれいに整理された漢文ではなく、句読点のない白文の読み解きにチャレンジしました。キーワードとなる助字を手がかりに、それらの対応関係を見つけていくと、長文の漢文でも比較的容易に読むことができます。じっくりと時間をかけ、みんなで試行錯誤をしながら漢文を読解するという、ぜいたくな学びの時間となりました。



文学(・映画)とともに探る「共生」の可能性 (青柳 悦子 教授)

海外の文学や映画を通じて、世界のさまざまな地域への関心を広げ、多様性や共生について考えることを目指しました。ナイジェリア出身の女性作家アディーチェのスピーチを視聴し、北アフリカの文学や地域の特徴を学ぶとともに、さまざまな越境文学作品や海外アニメ映画などを紹介しながら、ディスカッションを行いました。大学院生がファシリテーターとなったことで、温かい雰囲気でのゼミは進みました。



哲学を遊ぼう！ ～みんなで話す+みんなで考える＝哲学カフェ (五十嵐 沙千子 教授)

参加者からテーマを募り、「勉強」と「校則」について語り合いました。学校での義務、先生や親との関係などにまつわるモヤモヤを率直に話し、どうやったらそれが解消されるかを考えました。最初はうつむき加減だった参加者たちも、自分だけの狭い世界から解放されていくにつれて、共感や気付きが生まれ、前向きな気持ちや仲間意識を得ることができました。最後はみんな笑顔で、新学期が楽しみになりました。

ACADEMIC

SAKURA SCIENCE High School Program Online University Visit - University of Tsukubaを開催

6月19日、科学技術振興機構(JST)と本学の共催ウェビナー“SAKURA SCIENCE High School Program Online University Visit - University of Tsukuba”を開催しました。

「さくらサイエンスプログラム」は、産学官連携により、海外の若者を日本に招へいし、日本の科学技術を体験してもらう目的でJSTが実施しているもので、本学も各国の高校生を受け入れています。今回のウェビナーのテーマは“Philosophy meets Technology”。数理工学系の櫻井岳

暁教授と学生による「総合理工学位プログラムの紹介」、システム情報系の大澤博隆助教と学生による「ヒューマンエージェントの相互作用」と題したトークライブ、人文社会系の土井裕人助教による「テクノロジーで拡張する人文学」の講義ムービー、国際室のシャー勝間田職員による本学の教育研究や学生生活紹介の他、日本学生支援機構による留学制度の説明など、進学を検討する海外の高校生ら約5,300名が視聴しました。



櫻井教授(左上)、土井助教(右上)、大澤助教(右下)、国際室のシャー勝間田職員：進行役(左下)

本学英語プログラム紹介HP
<http://www.global.tsukuba.ac.jp/>



Sakura Science Exchange Program HP
<https://ssp.jst.go.jp/EN/jst/online5.html>



EVENT

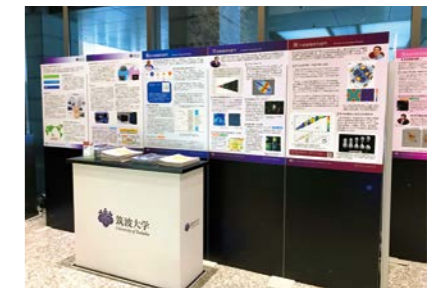
計算科学研究センターの研究紹介を展示

8月19日～9月22日、文部科学省情報ひろばにおいて、本学計算科学研究センターに関する企画展示「宇宙の成り立ち、生命の起源、そして未来社会 -学際計算科学からの挑戦-」を開催しました。

計算科学は、データ解析はもとより、さまざまな分野への応用が可能です。今回の展示では、本学が開発した多重複合型演算加速スーパーコンピュータ

Cygnusをはじめ、ブラックホールから地球環境、COVID-19まで、センターが取り組んでいる学際的な幅広い研究を、パネルと動画で紹介しました。

これらの動画は、センターのYouTubeチャンネルで公開しています。



計算科学研究センターYouTubeチャンネル:

<https://www.youtube.com/channel/UCVX0tpHNmCAo8-2ho0mLG5Q>



NEWS & ANNOUNCEMENT

クラウドファンディングにより全国初の「DPATカー」を導入

7月18日、本学附属病院の災害派遣精神医療チーム(DPAT)の特殊緊急車両「DPATカー」の完成披露会が行われました。クラウドファンディングにより、目標額750万円を上回る支援をいただき、実現したものです。

このような専用車両は全国初で、被災地での長期滞在を想定し、衛星電話や

サブバッテリー、冷蔵庫などを搭載するとともに、カウンセリングや宿泊といった、さまざまな用途に活用できるよう、座席のないスペースが設けられています。また、車体のデザインは、稲妻のように被災地に駆けつける、というイメージを表しています。

DPATは、災害時に、現地で被災者の



こころのケアに当たる専門家チームで、本学では、2016年に結成され、熊本地震をはじめ、さまざまな災害で活躍してきました。DPATカー導入により、活動の範囲がますます広がると期待されます。

日本貿易振興機構(ジェトロ)と包括的連携推進協定を締結

8月5日、本学とジェトロは、学術研究面、人材教育面および産学連携面等での国際的な展開に関して、相互の連携を推進するための包括的連携推進協定を締結しました。

本協定は、国際産学連携によるイノベーションの共創、大学発ベンチャーの成長による地域エコシステムの発展、高度グローバル人材の育成・定着による世

界に開かれた地域の形成等を柱としています。

今回の協定締結を契機に、双方が有するリソースを組み合わせ、世界を視野に入れたイノベーションの創出を推進するとともに、我が国の経済発展と人材育成に貢献することを目指します。



左：永田恭介学長 右：佐々木伸彦JETRO理事長

構内の先進的スーパーマーケットがオープン3周年

学生の食生活を豊かにすることを目的に、株式会社カスミの協力のもと、筑波キャンパス内にオープンしたスーパーマーケット「カスミ筑波大学店」が、今年の10月で3周年を迎えました。

主な利用者は学生という大学構内店舗の特性を生かし、すべてセルフレジで、クレジットカードや電子マネーなどを用いた完全キャッシュレスのシステムとなっています。また、レジに並ばずに決済できるモバイルアプリ「Scan&Go Ignica」を、他店舗に先駆けて導入しました。

店内には、本学T-PIRC(つくば機能植物イノベーション研究センター)の農



場で栽培された「Tぱーくん」ブランドの農産品をはじめ、さまざまな食文化に対応した輸入食材やハラル食品などもそろっており、留学生を含めた多くの学生や教職員、さらに近隣の住民も利用しています。

2020年には医学群生とコラボし、心肺蘇生や餅を詰まらせたときの対処方

法などを、店内からSNSで配信。2021年には購買行動に関する研究調査を行うなど、本学と地域企業との連携による価値創造の場にもなっています。

Twitter: カスミ筑波大学店公式Twitter



TSUKUCOMMが電子書籍になりました

本誌TSUKUCOMMが、電子書籍として閲覧できるようになりました。これまで、紙媒体をベースとして作成、配布し、併せてPDF化したデータを本学基幹サイトに掲載してきましたが、電子書籍化したことで、パソコンやモバイルデバイスの画面上での操作が可能になり、

読みたいページへもスムーズに移動できます。書棚とリストの2パターン表示があり、第1号から閲覧できますので、ぜひご利用ください。

<https://tsukucomm.sec>

tsukuba.ac.jp/



東京2020オリンピック・パラリンピックで、本学および附属校など在校生・卒業生が活躍。あわせて金メダル2個、銀メダル3個、銅メダル4個!!



木村選手 写真：松尾/アフロスポーツ



永瀬選手 写真：柴田純/アフロ



梶原選手 写真：望月秀太郎/アフロ

オリンピックメダリスト・入賞者一覧

氏名	所属()内は現所属 ※卒業生は卒業年	最終順位/記録
● 永瀬 貴規	体育専門学群2015年度卒 (旭化成株式会社)	【柔道男子81kg級】金メダル 【柔道男女混合団体戦】銀メダル
● 梶原 悠末	大学院・体育学学位プログラム2年	【自転車競技/トラック 女子オムニアム】 銀メダル 110点
三宮 薫	体育専門学群2019年度卒 (川崎フロンターレ)	【サッカー男子】4位
榎本 遼香	大学院・体育学専攻2年	【シンクロナイズトダイビング3m飛板飛込】 5位 269.40点
李 博	体育専門学群2012年度卒 (東レ株式会社)	【バレーボール男子】7位
熊谷 紗希	体育専門学群出身 (ドイツFCバイエルンミュンヘン)	【サッカー女子】8位
南 萌華	体育専門学群2020年度卒 (三菱重工浦和レッズレディース)	

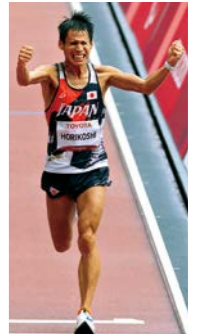
パラリンピックメダリスト・入賞者一覧

氏名	所属()内は現所属 ※卒業生は卒業年	最終順位/記録
● 木村 敬一	附属視覚特別支援学校高等部卒 (東京ガス株式会社)	【競泳男子】 100mバタフライ(S11) 金メダル 1:02.57 100m平泳ぎ(SB11) 銀メダル 1:11.78 200m個人メドレー(SM11) 5位 2:29.87
● 高橋 利恵子	大学院・障害科学学位プログラム2年	
● 天摩 由貴	附属視覚特別支援学校高等部卒 (株式会社マイテック)	【ゴールボール女子】銅メダル
● 若杉 遥	附属視覚特別支援学校高等部卒 (ALSOK)	
● 萩原 紀佳	附属視覚特別支援学校小学部卒 (国立障害者リハビリテーションセンター)	
● 堀越 信司	附属視覚特別支援学校高等部卒 (西日本電信電話株式会社)	【陸上男子】 マラソン(T12) 銅メダル 2:28:01
● 藤原 大輔	体育専門学群2015年度卒 (ダイハツ工業株式会社)	【バドミントン男子】 シングルス(SL3) 4位 【バドミントン混合】 ダブルス(SL3-SU5) 銅メダル
● 米岡 聡	附属視覚特別支援学校高等部卒 (三井住友海上火災保険株式会社)	【トライアスロン男子】 (PTVI(視覚障害)) 銅メダル 1:02:20
鈴木 徹	大学院・体育学専攻2017年度修了 (SMBC日興証券株式会社)	【陸上男子】 走高跳(T64) 4位 1m88
高田 千明	附属視覚特別支援学校中学部卒 (ほけんの窓口グループ株式会社)	【陸上女子】 走幅跳(T11) 5位 4m74
園部 優月	附属視覚特別支援学校高等部普通科3年	
寺西 一	附属視覚特別支援学校高等部卒 (株式会社GA technologies)	【5人制サッカー(ブラインドサッカー)】 5位
黒田 智成	大学院・教育研究科2003年度修了 (都立八王子盲学校(教諭))	
川嶋 悠太	附属視覚特別支援学校鍼灸手技療法科卒 (アシックスジャパン株式会社)	【ゴールボール男子】 5位
瀬立 モニカ	体育専門学群4年	【カヌスプリント女子】 カヤック200m(KL1) 7位 57.998
石浦 智美	附属視覚特別支援学校高等部卒 (伊藤忠丸紅鉄鋼株式会社)	【競泳女子】 50m自由形(S11) 7位 30.85 100m自由形(S11) 8位 1:13.80 【競泳混合】 400mリレー(49ポイント(視覚障害)) 5位 4:08.66
山田 拓朗	体育専門学群2013年度卒 (株式会社NTTドコモ)	【競泳男子】 4×100mメドレーリレー(34ポイント) 8位 4:29.85 200m個人メドレー(SM9) 8位 2:27.18

※敬称略、順不同



米岡選手(右) 写真：長田洋平/アフロスポーツ



堀越選手 写真：西村尚己/アフロスポーツ



左から、萩原選手、天摩選手、高橋選手、5人目若杉選手 写真：YUTAKA/アフロスポーツ



藤原選手(右) 写真：アフロスポーツ

新種の大型肉食恐竜を発見！

ティラノサウルスなどのティラノサウロイディア類は、恐竜時代の最後(白亜紀最末期)に繁栄した肉食恐竜としてよく知られていますが、その前に陸上を支配していた恐竜がカルカロドントサウルス類です。全長が最大で13メートルにも達し、ジュラ紀の終わりから白亜紀にかけて生態系のトップに君臨していました。しかし、白亜紀半ばに北半球から姿を消し、代わって、それまで小型だったティラノサウロイディア類が巨大化して捕食者の頂点に昇り詰めました。この交代劇は世界的に注目されているものの、化石記録が乏しく、これまでの研究は北米に限定されていました。

生命環境系の田中康平助教らの研究グループは、ウズベキスタン共和国の後期白亜紀(約9000万年前)の地層から見つかった恐竜の化石が、カルカロドントサウルス類の新種であること突き止め、「ウルグベグサウルス・ウズベキスタンシス」と命名しま

した。全長は7.5~8メートルもあり、同国で見つかった肉食恐竜としては最大です。この地層からは、過去に小型のティラノサウロイディア類も見つかっており、アジアで両グループが共存していたことが初めて示されました。また、両グループの共存記録としては、世界で最も新しい時代のものです。



ウルグベグサウルス・ウズベキスタンシス(奥)の復元画(Julius T. Csotonyi 画) 同じ地層から産出するティラノサウロイディア類のティムレンギア(手前)よりもずっと大型の肉食恐竜であることが分かる。

今回の発見により、カルカロドントサウルス類は少なくとも9000万年前頃まで強力な捕食者としてティラノサウロイディア類を圧倒しており、ティラノサウロイディア類の多様化・巨大化はその後起こったことが明らかになりました。

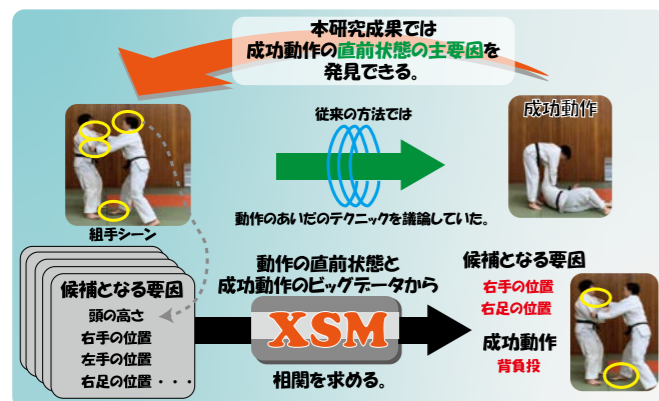
柔道の投げ技を決めるコツをビッグデータで探る

現代のスポーツトレーニングでは、映像を用いて選手の運動を理解することが主流です。しかし、数式化した運動モデルでは、統計的・経験的な要素を排除することはできず、動作のコツを標準化することは難しいままでした。また、従来は個人の運動能力に焦点を当てた研究が中心で、格闘技など対戦相手からの力を受けるスポーツ

では、運動のモデル化も困難でした。システム情報系/ヒューマン・ハイパフォーマンス先端研究(ARIHHP)センターの山際伸一准教授は、柔道の映像を元にしたビッグデータを活用し、投げ技を成功させる直前の体勢を明らかにする手法XSM(Extraction for Successful Movement)を開発しました。XSMでは、投げ技直前の投げる側と投

げられる側の体勢について、その鍵となる要因(頭の高さや袖のつかみ方、足の位置など)をできるだけ多く選択します。また、成功と認められる動作を分類し、定義します。本研究では、柔道の世界選手権とワールドマスターズ大会における、投げ技が成功した781件の映像から、これらを組み合わせたビッグデータを構築しました。それらのデータに χ^2 (カイ二乗)検定と呼ばれる統計手法を適用し、成功直前の体勢と投げ技の種類との相関を求めることで、その投げ技が成功する直前の体勢を構成する要因を明らかにしました。

これにより、目的とする技を成功させるためのコツを引き出すための、新たなトレーニング理論を導くことが可能となります。さらに、この手法を利用して、対戦相手が技に入る前の癖を発見できることから、試合での戦略を練る際にも役立つと考えられます。



本研究で開発したXSMにより、投げ技を成功させるための直前の体勢がどのような要因で構成されているかを明らかにすることが可能となった。



制限があります。そこで、運動場に2~6年生が集まり1年生を迎えて開会し、その後は、主にオンラインでの実施となりました。

運動場に集まった際も、大きな声は出せません。ですので、拍手をしたり、4色の旗を持って走る子に合わせて大きなウェーブを作ったりしながら、全員で盛り上げました。

この日のために、「つながりくん」という大きなメッセージカードも作りました(写真左上)。入場時のソーシャルディスタンスを保つために活用し、最後は1年生にプレゼントしました。

どんな状況でも、新たにできることを見つけて楽しむ、つくばっこ魂あふれる会となりました。

ようこそ附属小へ！ 「つながりくん」で新1年生を歓迎 附属小学校

「筑波小とともに学び、キラキラ輝こう」「みんなで1年生をお祝いしたい」。3年生の実行委員の思いを込めて、5月20日の「1年生を迎える子ども会」に向けた準備が始まりました。毎年恒例の行事ですが、今年は感染拡大防止のため、講堂を使うにも人数



筑波大学には11の附属学校があり、それぞれの分野でわが国の教育をリードしています。各学校のユニークな授業や行事、活動などを紹介します。

コロナ禍で中止となった文化祭の代わりに、高等部では、朗読劇を中心にした行事を企画し、7月12日に実施しました。

午前の部の朗読劇発表会は、各学年2団体の6団体によるコンテスト形式で行われました。朝日新聞社主催「声のカプロジェクト」の一環として、「ドラえもん」役として有名な声優の水田わさびさんが、



リモートで特別審査員として参加されました。離れていても「声の力」が十分に伝わったこと、正統派からコメディタッチのもの、社会問題を盛り込んだシリアスなものまで、さまざまな内容が扱われたこと、短い準備期間と多くの制約の中で完成度の高い発表ができたことなどを評価していただきました。

午後の部はステージ発表でした。歌唱不可、マスク着用などのルールを守りながら、バンド演奏、バイオリン演奏、演劇の3つの発表がありました。どれも午前の部同様の素晴らしいパフォーマンスで、会場は一体となって盛り上がりました。

附属視覚特別支援学校 熱いパフォーマンスで声の力を届けよう



手軽な運動がよい感じです

BATON 01 人間系 安藤 智子さん



在宅勤務が増えてから、意識して運動の時間をつくるようにしています。近所をジョギングしたり、YouTubeでみつけたヨガやストレッチをするようになりました。最近見つけた手軽で継続できる運動は、通勤時に地下鉄1駅分を歩くことです。東京キャンパス最寄りの茗荷谷駅の隣駅まで、公園を二つ抜ける少し遠回りの道を歩きます。木の葉の色や香りなどを感じながらリラックスできる時間にもなります。

NEXT▶▶▶ 次回は、社会人大学院等支援室の児玉静香さんです。

BATON 研究を進めるにあたって、諸々相談して助けてくださる頼りになる方です。お子さんの話を伺うのも楽しみです。

目指せ優勝!

BATON 02 体育系 堀口 文さん



筑波大学に入学し、「ラート」というスポーツに出会ってから早12年。3年前からは教員として働きながら、現役選手として競技を続けています。昨年は、新型コロナの影響で世界選手権が延期、そして今年に入ってから中止が決まりました。一度は目標を失いかけていましたが、次回大会での優勝を目指して気持ちを新たに頑張っています!ラートは難しく見えますが、実は誰でも体験できるスポーツです。大きな輪っかの中に入って回るので、ソーシャルディスタンスも保てます!気に入った方は是非検索してみてください!

NEXT▶▶▶ 次回は、アスレチック部門の稲垣和希さんです。

BATON 大学の同期で、私の親友の旦那さんでもあります!スポーツ・健康心理学の専門家である彼には、競技をする上で悩んだ時にいつもお世話になっています!

つくばの食材で元気に

BATON 05 教育推進部 西野 真由美さん



大阪からつくばに来て6年半経ちました。日々の生活の中で、樹々の彩り、鳥やカエルの声、そして新鮮な食材を愛でています。休みの日は自転車で直売所を周り、時には自ら狩り(写真はブルーベリー狩り)、できる限り近い距離で作られた食材を選択しています。家庭菜園をしている方が分けてくださる季節の野菜も楽しみです。主食の米・小麦からデザート・果物まで、ほぼ全ての食材がつくば産で揃います。「四里四方に病なし」という諺のとおり、つくばの食材で健康を保ち、元気に仕事に取り組んで、未来を担う学生たちの役に立ちたいです。

NEXT▶▶▶ 次回は、体育系の清水諭さんです。

BATON 昨年度までは教育担当副学長として、本年度は学長特別補佐として、実直に入試の課題に取り組んでくださっており、感謝と尊敬の念でいっぱいです。気さくに接してくださり仕事以外の話をするのもあって楽しいです。

同窓生とのうれしい再会

BATON 06 国際局 矢内 理恵子さん



筑波同窓会「インドネシア」の皆さま(筆者左から2人目)

国際室が2年前に対面で行ったリクルーティング活動の最後の訪問先で、筑波大学同窓生(元留学生)と再会しました。互いに覚えていた方とはなんと約20年ぶり。学生は案外覚えてくれているもの、と聞いていたものの、それを経験したのは初めてでしたので、とてもうれしい出来事でした。日本もインドネシアも新型コロナウイルス感染症による影響で心配な状況です。当時の思い出話で話題が尽きなかったあの時間を思い出しながら増えています。できるだけ早い往來の再開を願ってやみません。

NEXT▶▶▶ 次回は、人文社会エリア支援室の加藤美貴さんです。

BATON 加藤さんは、自分に不足している分野の知識の引き出しに、情報を放り込んでくれるありがたい仲間です。いつもありがとうございます!

元気をくれるとんかつ屋

BATON 03 図書館情報エリア支援室 芳賀 拓巳さん



学生街ということもあり、筑波大学近辺にはボリュームのある料理を提供してくれるご飯屋さんが多い印象です。その中で、私が学生の頃からお世話になっているとんかつ屋「とんとこ豚」さんを紹介させていただきます。もう7年近く通っていますが、いつ食べても美味しい料理と、気さくでハンサムな店長さんにいつも元気をもらっています!テレビでも紹介されたことのある名店「とんとこ豚」。今はコロナ禍でなかなか行けていませんが、機会がありましたら皆さんも是非一度。

NEXT▶▶▶ 次回は、人文社会エリア支援室の江崎奈津子さんです。

BATON 大学時代からの同期で、とても明るく接しやすい方です。落ち着いたら、また飲みに行きましょう!

ミニマムな暮らしを追求

BATON 04 システム情報系 善甫 啓一さん



情報系の研究者だからか、身の回りはシンプル・ミニマム・効率的にしたい。カードが5枚、コインが999円しか入らない小さい財布(を模したDIY品)を使っていた。ところが、スマホ決済アプリの戦国時代を経て、コロナ禍の意識変革も相まって、つくばでもキャッシュレスで決済可能な店舗が増えたので意を決する。「鍵と財布が邪魔くさい」。決済は基本的にスマホで。ラボも自宅もアプリで解錠。財布は極限まで薄くして、免許証とメインカード、ギターピックさえあれば良い。次はスマホから開放される道を探るのでしょうか。

NEXT▶▶▶ 次回は、総合学域群の登坂章博さんです。

BATON 指定国立大学法人のヒアリングの際にお世話になりました。同い年という事もあり音楽的方向性が近いので、コロナ明けたらIMAGINE THE FUTUREのヘビメタver.を録りに行きましょう!

ツクバでツナがる 5000人を超す教職員がいる本学。 それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。

リレーメッセージ

水泳に魅了されて

BATON 07 数理物質系 末益 崇さん



まだ子供が小さかった頃、彼らとサッカーに興じていたところ、日頃の運動不足がたたりギックリ腰になってしまいました。これがきっかけとなり洞峰公園の水泳教室に入り、今や出張先にも水着を持っていくほど水泳に魅了されています。写真は、人生で初めて水泳大会で獲得した金メダル(大会新記録)です!屋休みには筑泳会メンバーとして学内温水プールで、その日の体調を感じながら気持ちよく泳ぎます。50m温水プールが、洞峰公園と合わせて市内に2つもある幸運にとっても感謝しています。水の中、気持ちいいですよ。いかがですか?

NEXT▶▶▶ 次回は、URA研究戦略推進室の萩原友希子さんです。

BATON 研究戦略室長を務めていたときに、資料作りでとてもお世話になった方です。

一期生を応援しています

BATON 08 総合学域群 高橋 あかりさん



2021年4月、総合学域群の一期生420名が入学しました。コロナ禍でオンライン授業が中心となる中、せっかくなのでキャンパスライフを少しでも楽しんでもらいたいと企画した一つが総合学域群七夕イベントでした。短冊に願いごとを書く、というごくありふれた内容ですが、123ものカラフルな願いが集まりました。学生たちのキラキラした夢や素直な本音、ネタとして書いたであろう野望など、個性豊かな短冊が少しずつ増えていきました。おそらく、今回のイベントを最も楽しんだのは、毎日その様子を眺めていた私だと思います。

NEXT▶▶▶ 次回は、事業開発推進室の奥山道陽さんです。

BATON 情熱と笑顔溢れる方で、お会いするたびに元気がやる気をいただいています!実は妹の学生時代の部活の先輩、というつながりで姉妹共々お世話になっています。



TSUKU COMM【ツクコム】(筑波大学広報誌) vol.53 令和3年10月発行 編集・発行：筑波大学広報室
〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1 電話：029-853-2063 E-mail：kohositu@un.tsukuba.ac.jp URL：www.tsukuba.ac.jp
©2021 筑波大学(本誌記事の無断転載を禁じます)

